水沢市埋蔵文化財調査センター調査報告書　第４集

常盤小学校遺跡

１９９５

財団法人 水沢市埋蔵文化財調査センター

序　　文

平成５年11月に埋蔵文化財発掘調査と公開展示施設及び研修室等を兼ね備えた水沢市埋蔵文化財調査センターが胆沢城跡外郭南門前に建設されました。

今まで、市内の発掘調査は教育委員会で行ってきましたが平成６年４月より当センターが発掘調査はもとより考古学資料の展示、考古学研修講座等による啓蒙活動の推進を合わせ実施致しております。発掘調査に終わるだけでなくそれらの文化財のもつ貴重な意義について理解し保護しようとするそんな方向にセンターが機能すれば幸いであると考えております。

現在水沢市内には263か所の埋蔵文化財の遺跡が確認されております。更に、平成６年度には８か所を発掘調査致しました。(石田Ⅱ遺跡、中平遺跡、熊野堂遺跡、車堂Ⅱ遺跡、常盤小学校遺跡、跡呂井舘跡遺跡、胆沢城跡、常盤広町遺跡）胆沢城跡を除き７か所の調査は開発計画や個人住宅建設に伴うものであります。埋蔵文化財について従来の考え方は､「まず保護しよう」ということで推移してきたが、現在では「もっと積極的に活用し、整備していくことが必要である」というものに変わってきています。このような考え方にそって私どもは発掘調査にあたっております。また、そのような主旨のもとに消えゆく遺跡の記録を後世に伝える大事な責務を帯びた報告書であることを自覚し本書の作成にあたりました。

また、速報展により各遺跡の発掘状況や結果については、写真や図で、**遺物は**展示してお目にかけました。本報告書に掲載されている内容はそれらのものを更に詳細に記録保存したものであります。

終わりになりますが、水沢市の埋蔵文化財保護行政の推進にあたりましては、今後とも一層の関係各位のご理解とご協力をたまわりますようお願い申し上げます。

平成７年３月25日

水沢市埋蔵文化財調査センター
所長　及　川　由　己

例　　言

1．本書は、岩手県水沢市神明町一丁目19－１に所在する常盤小学校遺跡の発掘調査概報である。

2．調査は、児童館建設工事に伴う事前調査として実施されたものであり、水沢市の委託により、水沢市教育委員会の指導のもとに財団法人水沢市文化振興財団水沢市埋蔵文化財調査センターが行った。

3．常盤小学校遺跡の調査対象面積は355㎡であり、うち調査実施面積は534.64㎡である。

4．発掘調査期間は、平成６年11月８日～平成６年12月17日、以後、平成７年３月31日まで室内整理作業を行った。

5．発掘調査は、伊藤博幸、高橋千晶が担当した。

6．本書の作成は、遺構、遺物の実測及びトレースは調査担当者の外に、千田サノ子、青木綾子、渡辺弘子が行い、写真、執筆、編集は伊藤、高橋が行った。

7．本書に掲載の地形図は、水沢市都市計画図（縮尺2,500分の１）を原寸のまま使用し、スケールを付していない。

8．本書で使用する遺構表示略記号は、下記による。
　SD：溝　SK：土壙　SX：その他不明遺構

目　　次

序　文
例　言
Ⅰ．遺跡の位置と環境 …… 1
Ⅱ．遺　構 …… 5
Ⅲ．遺　物 …… 9

図　版

Ⅰ．遺跡の位置と環境

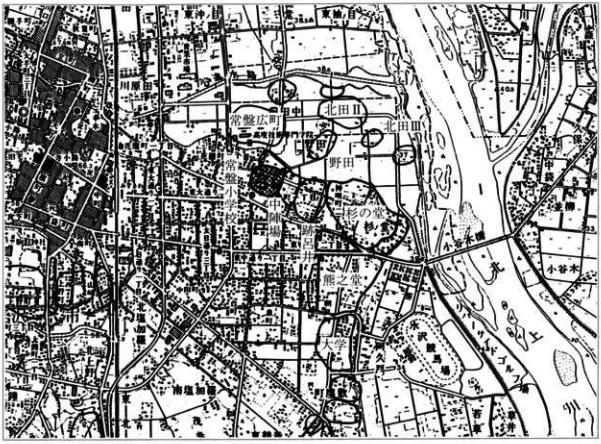
常盤小学校遺跡は水沢市街地の東方約１㎞の、水沢段丘上位面北東縁辺部一帯に広がる跡呂井遺跡群の中の西端に位置する。[註1] 段丘の北は比高差４～５ｍで、同段丘下位面の谷底平野に面する。遺跡のある上位面には縁辺部に沿って奈良・平安時代から中世前期の集落が連綿と続いてある。

遺跡のすぐ北側には、別名岩瀧館ともいわれる照井太郎・岩瀧太郎左衛門の居城伝承をもつ跡呂井館跡[註2]があり、これは中・近世城館跡のひとつに数えられる。東側には跡呂井中陣場西遺跡[註3]（平安）、同中陣場遺跡[註4]（中世前期）、跡呂井二ツ壇遺跡[註5]（奈良時代）と続き、東端には平安時代の集落跡杉の堂坂口遺跡[註6]がある。

上記諸遺跡が位置する段丘崖面は、跡呂井館跡の西と同中陣場遺跡の東側に小支谷が南北方向に入り、それぞれの遺跡の範囲を画する。北の谷底平野には弥生時代、平安時代の水田跡が発見された常盤広町遺跡[註7]がある。

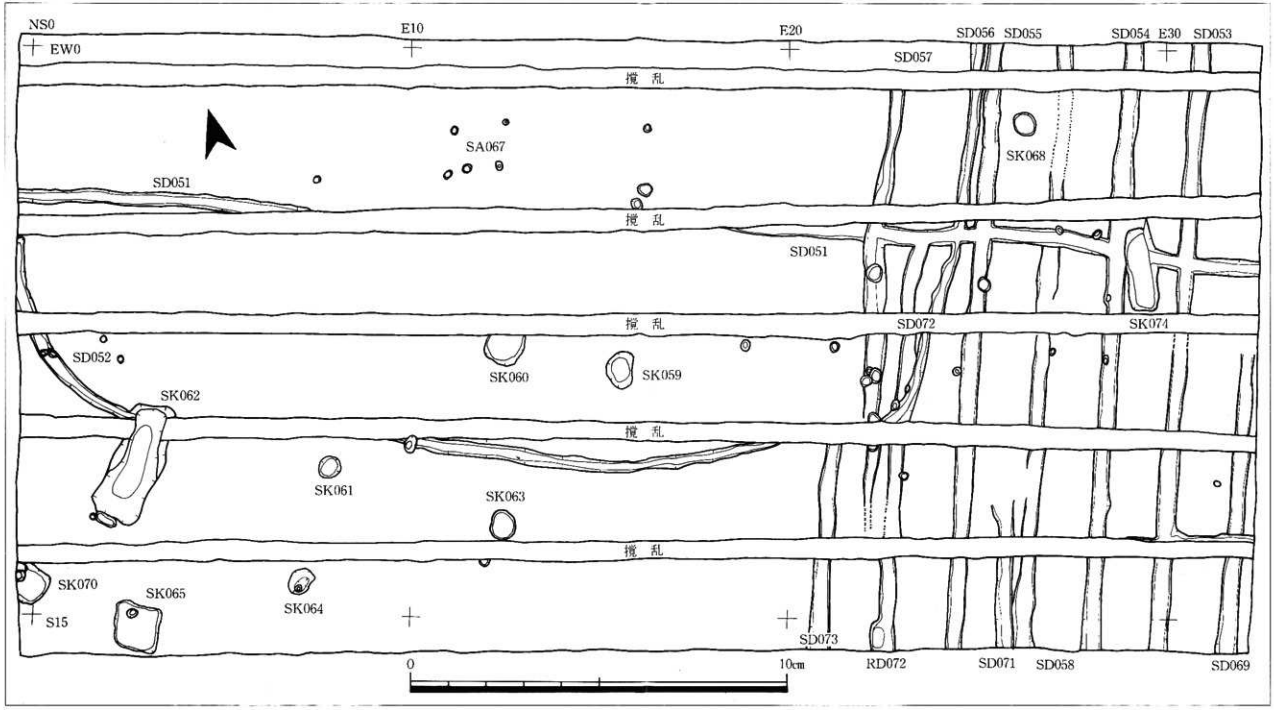
常盤小学校遺跡はこれまで1989・90・92年度に発掘調査が行われ、主に奈良時代後半の集落跡を検出し、竪穴住居跡、溝跡、土壙跡などの遺構と、土師器の甕、鉢、杯、須恵器甕、鉄斧、土錘、土製紡錘車などの遺物を多く発見している。

今年度の発掘調査区は、従来の調査区のすぐ東側にあたり、遺構の発見が予測される地域でもある。現状は畑地である。



第１図　遺跡位置図（１：25,000）

第２図　遺跡周辺地形図（１：2,500）発掘区アミ部分



第３図　常盤小学校遺跡遺構配置図

II. 遺　構

発掘調査で発見した遺構には、溝跡11条、土壙跡10、柱穴多数がある（図版１～６、第３図）。以下、主な遺構について述べる。

溝跡SD051・052・056・071（第３・４・５図）

このグループは、地山直上から掘削される溝跡で、当遺跡の中ではもっとも古い遺構群に属する。

溝跡SD051は発掘区中央やや北寄りから東西方向に発見された素掘りの溝である。東西の両端は発掘区外に延びており不明。溝中央付近は、暗渠溝による攪乱のためほとんどを失っている。東側では土壙跡SK074に破壊され、さらにその西側では南北方向に延びる溝跡群によって壊されている。しかし、遺存部の状態は良好で、その観察では掘削はていねいで、断面緩いU字形を呈している。規模はほぼ一定で、幅35～40cm、深さ約15cmある。埋土は最下部の黄褐色シルト地山小ブロックを除けば、黒褐色土の単層である。埋土中からは土師器と須恵器の細片が多く出土している。

溝跡SD052と溝跡SD056は同一の溝である。この溝は発掘区中央付近からやや隅の張る平面U字形を示して発見された素掘りの溝である。東側で北に折れて、ほぼまっすぐ南北方向に延びた端部は発掘区外に到るが、西側では、緩く弧を描いて北に延びた端部は、溝跡SD051の東西溝の手前で掘削が止まっている。溝のプランは数カ所で暗渠による掘削のため寸断されている。他の遺構との重複関係では西側では土壙跡SK062と重複し、溝が壊される。東側では、東西溝SD051と重複するが、埋土が同じことから関係は不明である。発掘区北壁際の北端部では隣接する南北溝SD055に東岸が破壊される。溝の掘削は、西半部がていねいで深い掘り込みである。この付近での両岸はわずかに外傾するていどの傾斜を示し、溝底はほぼ平坦である。規模は幅20～25cm、深さ15～20cmある。埋土は黒褐色土の単層で、黄褐色シルト粒が下部で多く混じる。埋土中から土師器細片が数点出土している。

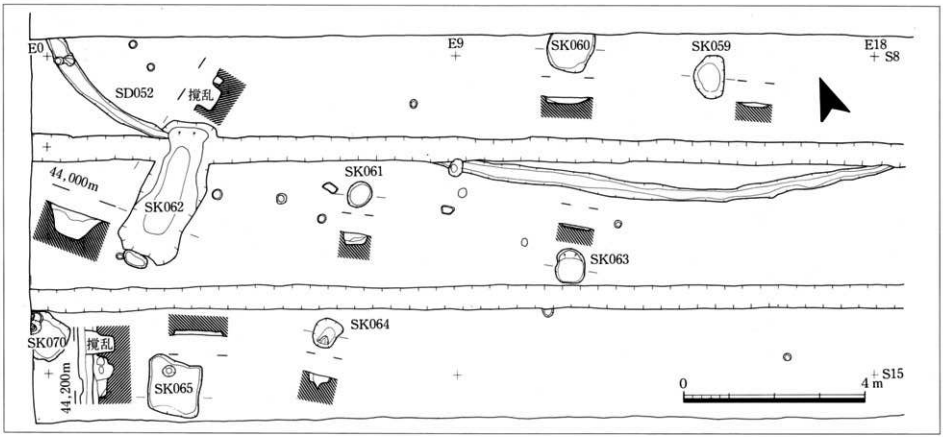
溝跡SD071は発掘区南東寄りの南壁際付近から溝跡SD058と重複して南北方向に発見された素掘りの溝で、重複関係はSD058が新しい。南端部は発掘区外に延びるため不明であるが、全長約４ｍ余りを検出した。北端部はプランが自然消滅している。溝の掘削は比較的ていねいで、両岸ともに緩く弧を描いて外傾し、溝底に至る。溝底には拳大の礫が見られる。南端部では東岸が溝跡SD058の西岸掘削で壊される。規模は幅40～45cm、深さ15～20cmである。埋土は黒褐色土単層で、部分的に黄褐色シルト小ブロックが混じる。南端付近埋土中から土師器破片が若干出土している。

溝跡SD069・053・054・058・055・072・057・073（第３・５図）

このグループは発掘区東半部からほぼ等間隔に７条南北方向に発見された溝跡である。発掘区全体の基準層序は厚さ20～25cmの表土層（現耕作土）と下層の厚さ10～15cmの黒褐色土層（旧表土層）からなり、この下に地山の黄褐色シルト層がある。

当該グループは上述した旧表土層上面から掘り込まれるもので、当遺跡の中ではもっとも新しい暗渠施設以前の遺構群に属する。これらのうち、SD069・072・057・073は溝跡の延長が中途で切れるもので、先端部でのプランが不明瞭となる。ちなみに、SD069とSD072・073の端部は北で途切れ、SD057は南で途切れている。なお、SD072発掘区南壁際では、古い溝状遺構が西岸寄りにあって、これをSD072溝西岸が壊してつくられている。これらの溝の規模は幅40～50cm、深さ15～20cmある。溝の掘削は断面箱形を呈するものが多い。埋土は比較的軟質の黒味のある黒褐色土が基本である。埋土中からの遺物はない。

溝跡SD053・054・058・055は南北端部が発掘区外に延びるもので、４条の溝間距離も溝岸上端で1.4m



第４図　発掘区西半部溝跡・土壙跡

等間と規則的である。溝の規模は幅40～50㎝、深さ15～20㎝と前出グループと同じで、掘削形態、埋土についても同様である。なお、溝からの出土遺物はない。

土壙跡SK059・063・065・070（第３・４図）

このグループは土壙の掘り込みが浅く、埋土に焼土、炭化粒を多く含み、壁面が焼けている一群で、いわゆる焼土遺構Ｂ－ａ）－①[注8]に分類されるものである。

土壙跡SK059は発掘区中央付近から発見された。平面形の規模は0.7m×0.95mで、長軸を南北方向に有する不整楕円形を呈し、深さ10㎝ある。壁の掘削は比較的ていねいで、シンメトリーに緩やかに外傾した側壁は、ほぼ平坦な底面に至る。壁のうち東側壁面が焼けて赤褐色に変色している。埋土は軟質黒褐色土単層で、焼土粒と炭化粒が混入している。底面上から土師器甕（非ロクロ製）片が２点出土している。

土壙跡SK063は発掘区中央南寄りでSK059の南西方約4.5mのところから発見された。平面形は0.65m×0.76mの長軸を南北方向に有する楕円状を示し、深さは７㎝前後ときわめて浅い。壁の掘削はほぼ垂直ぎみになされ、平坦な底面に至る。側壁及び床面は部分的に焼けている。埋土は焼土粒・炭化粒を多量に含んだ軟質黒褐色土が基本で、下層に暗褐色シルトの汚れが薄く堆積している。埋土からの出土遺物はない。

土壙跡SK065は発掘区南西隅付近、南壁際から発見された。平面形は不整の隅丸方形を示し、規模は1.15m×1.2m、深さ10㎝前後である。壁の掘削はていねいで、四壁はほぼ垂直に立つ。底面は平坦で、東側壁の一部を除いて、壁・床ともに固く焼けている。埋土は固くしまった黒褐色土単層で、焼土粒・炭化粒・灰等が多量に混じっている。埋土中から10点以上の土師器甕底部の破片と、数点の須恵器甕胴部片が出土している。

土壙跡SK070は発掘区南西隅付近、西壁際から発見された柱穴跡と重複した遺構で、さきのSK065の北西方約２mのところにある。遺構の西半部分が発掘区外にあるため、全形は不明だが、東西１m以上×南北0.95mの規模の隅丸矩形を示す。プランの北側は暗渠で破壊され、さらに北寄りに２つに重複した柱穴跡が掘り込まれ、土壙跡の北半底面を壊している。現状の深さ20㎝前後である。遺存部での掘削状況は比較的ていねいで、側壁は垂直ぎみである。底面はわずかに中央付近に向かって傾斜する。側壁・底面は焼けている。埋土は固くしまった黒色土で、焼土小ブロックが混じる。底面焼床直上に厚さ数㎝の炭層が残されている。埋土からの出土遺物はない。

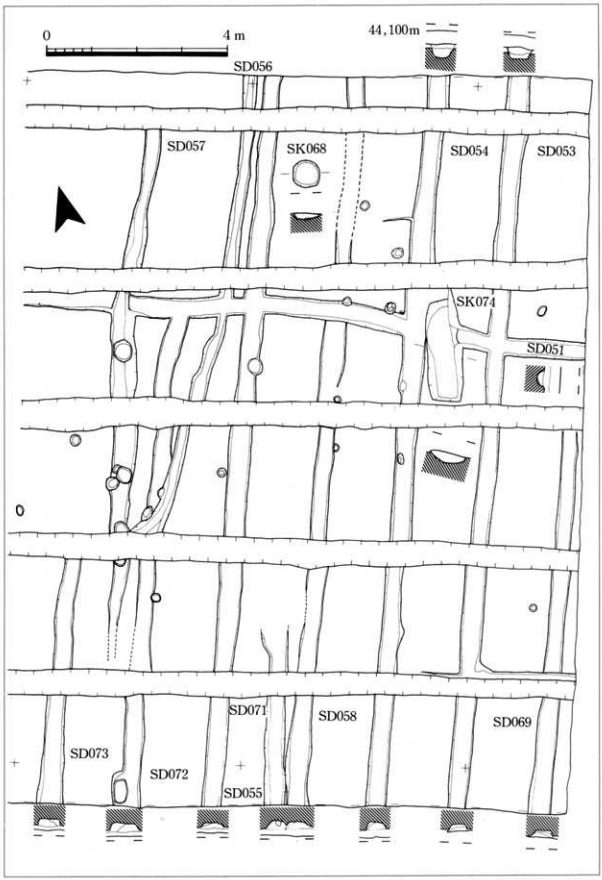
土壙跡SK068・074・060（第３・４・５図）

このグループは、前述のグループより土壙の掘削が深く、埋土に焼土粒あるいは炭化粒を含む一群で、壁面は焼けていないものである。遺構分類ではＢ－ｂ）－①[注9]に属する。

土壙跡SK068は発掘区東半部北寄りのところから発見されたもので、溝跡SD058とSD055の間にある。平面形の規模は0.6m×0.6mのほぼ円形を示し、深さ約15㎝ある。壁は比較的ていねいに掘削され、わずかに傾斜して底面に至る。底面はやや凹む。埋土は壁面側にわずかに黄褐色シルトの汚れがあるだけで、主体は固くしまった黒褐色土層である。埋土中に炭化粒が混じる。遺物は出土していない。

土壙跡SK074は発掘区東寄りのやや北側から発見された土壙で、東西溝SD051と重複し、SK074が新しい。平面形は南北方向に長い長方形を呈し、規模は0.8m×2.25mで、深さは最深部で約25㎝ある。壁の掘削は比較的ていねいで、緩く外傾する側壁はそのまま底面に至る。底面はいわゆる舟底状を呈する。埋土は固くしまった黒褐色土の単層で、黄褐色シルト粒と炭化粒が若干混じる。遺物は出土していない。

土壙跡SK060は発掘区中央やや西寄りのSK059の西約2.5mのところから発見された。輪郭北側が暗



第５図　発掘区東半部溝跡・土壙跡

渠掘削時の攪乱にあい失われている。規模は東西1.05m×南北0.8m以上あり、やや南北方向に長い楕円状を示す平面形と推測される。壁の掘削は外傾ぎみになされ、底面も平坦に掘り込まれている。深さは約15cmある。埋土は一部に見られる黄褐色シルトの汚れを除くと、全体は黒褐色土の単層で、焼土小ブロックが少量混じる。埋土中からの出土遺物はない。

土壙跡SK061・064（第３・４図）

いずれも発掘区南西寄りのところから発見された小土壙跡である。このうち土壙跡SK061は平面形が円形状を示し、規模は0.5m×0.6m、深さ25cmある。壁の掘削はていねいに行われ、わずかに外傾する側壁は平坦な底面へ続く。埋土は３層に分かれ、最上層は固くしまった黒褐色土層、中位層はやや暗い黒褐色土層で、下層が黄褐色シルト小ブロックの混じる黒褐色土層である。出土遺物はない。

土壙跡SK064はSK061の南約2.5mのところにあるピット状土壙である。平面形は不整円形を示すが、これは土壙プランに後に木根が入り込んだためにできた輪郭である。規模は0.55m×0.65m、土壙自体の深さは約20cmある。壁の掘削はていねいに行われ、ほぼ垂直ぎみに側壁は立つ。底面はほぼ平坦と推定される。埋土は、土壙のそれは単層で、固い黒褐色土層。中央に掘り込まれた形の木根のそれは夾雑物のない軟質黒色土単層で、根先は細くなって土壙底面を破壊している。いずれの埋土中からも遺物は出土していない。

土壙跡SK062（第３・４図）

土壙跡SK062は発掘区西端部のやや南寄りのところから発見された、当遺跡の遺構の中ではもっとも規模の大きいものである。輪郭北側で溝跡SD052と重複し、土壙跡が新しい。また、主体部北半は暗渠によって上端が破壊されている。平面形の規模は1.3m×3.1mで、南北方向に長いやや不整の隅丸長方形を呈し、深さ60cmある。壁の掘削は両岸とも傾斜角約30度でシンメトリーになされ、ほぼ平坦な底面に至る。側壁の角度が急なのと、深いことから壙底は狭い感じを受ける。なお、底面には柱穴跡は認められない。埋土は上・下２層に分かれるが、基本的には黒褐色土と黄褐色土シルトブロックが同量に混じる下層が主体で、上層は固くしまる黒色土に黄褐色土小ブロックが若干混じる程度のうすい堆積層である。埋土の下層から土師器甕・杯などの破片が数点と鉄製品が１点出土している。

柱穴跡SA067（第３図）

発掘区全体に小柱穴跡が散在している。規模は直径20cm前後の円形のものが多く、まれに径35cm、40～50cmのものが見られる。埋土は黒色土あるいは黒褐色土単層で、中には拳大の川原石を底に入れるものもある。深さ20～30cmある。埋土からの出土遺物はない。

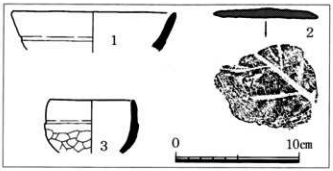
柱穴跡SA067は発掘区北半の中央やや西寄りのところにまとまってある小柱穴群である。平面形態は円形で、直径約20cm、深さ15cm前後ある。うち１つには底に川原石が詰められている。埋土は他の柱穴群と同じである。柱穴配置から建物や柱列を構成するものは認められない。

なお、先述の土壙跡SK062の周辺における柱穴跡は２個のみである。

Ⅲ．遺　　物

発掘調査で出土した遺物には、奈良時代を主体にした土師器、須恵器、鉄製品などがある（第６図）。以下、遺構ごとに記す。

常盤小学校遺跡発掘調査の遺構検出過程で、いくつかの遺物が出土している。発掘区西端地山上からは４個体分の土師器甕底部破片５点と同小杯（第６図３）１点が一括で出土した。このうち小杯は、



第６図　常盤小学校遺跡出土土器実測図

外面口縁部に段を有し、端部でわずかに内湾する形態で、内面は平滑にミガキで仕上げ、外面は口縁部横ナデ後ミガキ、底部方をヘラ削りする。推定口径6.8cm、器高4.3cm以上ある。

溝跡SD051出土遺物

埋土中から須恵器杯片４(うち口縁部３)、土師器杯片２、同甕胴部片２が出土している。他にロクロ土師器片１がある。須恵器は焼成良好で明灰褐色を示す。

溝跡SD052出土遺物（第６図）

土師器杯の破片が３点出土している。すべて内面黒色処理する。うち１点は口縁部片（第６図１）で、外面に浅い沈線状の段を有する。内面はミガキによって平滑に仕上げられている。推定口径13.4cm、器高3.2cm以上ある。他に土師器非ロクロ甕口縁部片が１点ある。

溝跡SD071出土遺物

外面口縁部に段を有し、内面ミガキの土師器杯片と同甕胴部片が各１点出土している。

土壌跡SK059出土遺物（第６図）

土師器非ロクロ甕の胴部と底部の破片が各１点ある。うち底部のもの（第６図２）は木葉底で、器壁の厚さ0.7cmある。外面縁部を逆時計回りにヘラ削りする。

土壌跡SK065出土遺物

土師器非ロクロ甕底部片のみ24点と須恵器甕胴部片２点がある。甕底部は胎土・色調・焼成・成形手法の特徴から約10個体分の底部と推定される。大半の底部外面は一定方向のヘラ削りが行われる。木葉底は１点だけである。須恵器はいずれも外面平行叩き、内面スリ消しが施され、焼成は堅緻である。

土壌跡SK062出土遺物

土師器非ロクロ甕胴部片３点、同杯片１点、鉄器１点などがある。土師器甕は外面タテ方向ヘラ削り、内面横位のハケ目調整を行う。同杯は内面黒色処理を行う平底のもので、底部から口縁部下半にかけての破片である。ロクロ成形か否かは、器面の摩耗が著しく不明である。鉄器は釘状の形態を示す。全体は錆に被われるが、現存長6.7cm、頭部の太さ1.2～1.3cmある。

註１　伊藤博幸・佐久間賢『水沢遺跡群範囲確認調査―平成元年度発掘調査概報―』水沢市文化財報告書第21集（水沢市教育委員会，1990年）

註２　前出註１文献。

註３　前出註１文献。

註４　伊藤博幸・佐久間賢外『水沢市神明町町跡呂井中陣場遺跡現地説明会資料』（水沢市教育委員会，1979年）

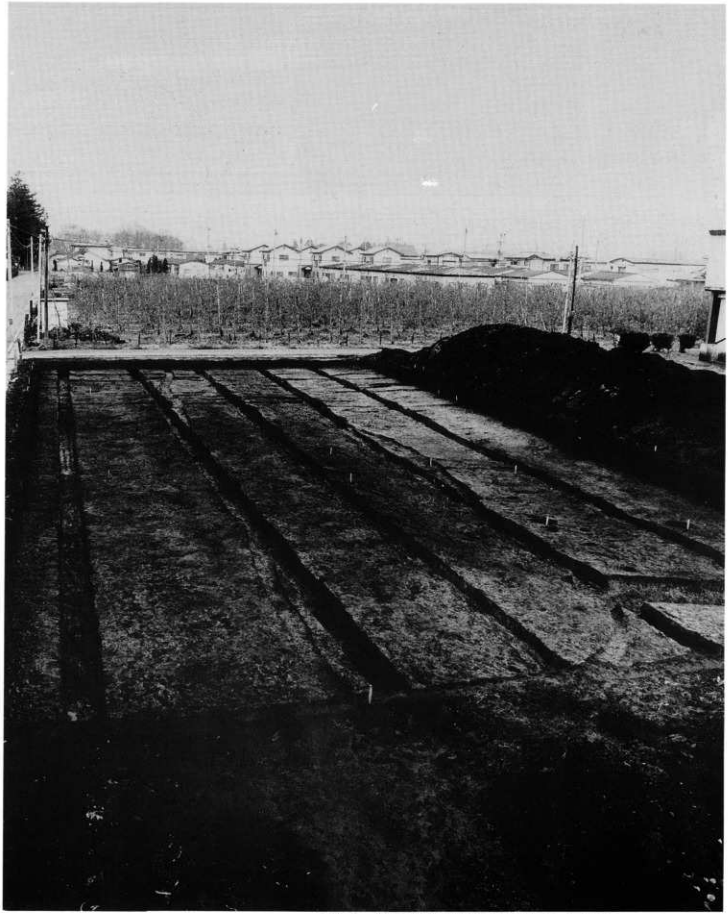
註５　前出註１文献。

註６　伊藤博幸・佐久間賢・土沼章一『水沢遺跡群範囲確認調査―昭和61年度発掘調査概報―』水沢市文化財報告書第16集（水沢市教育委員会，1987年）

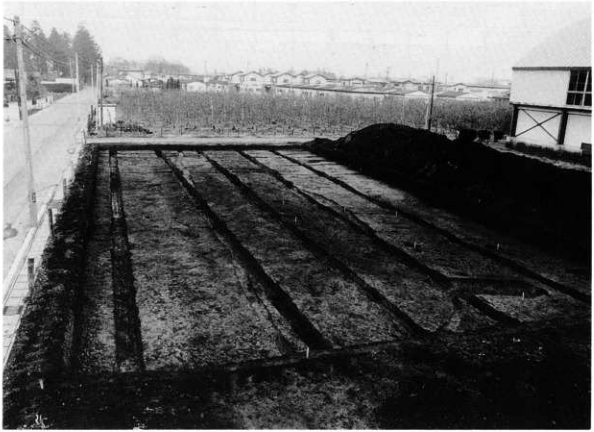
註７　伊藤博幸「岩手県水沢市常盤広町遺跡」『日本考古学年報（1989年度版）』41,1990年）
同『弥生水田跡発掘調査現地説明会資料―常盤広町遺跡』（水沢市教育委員会，1989年）

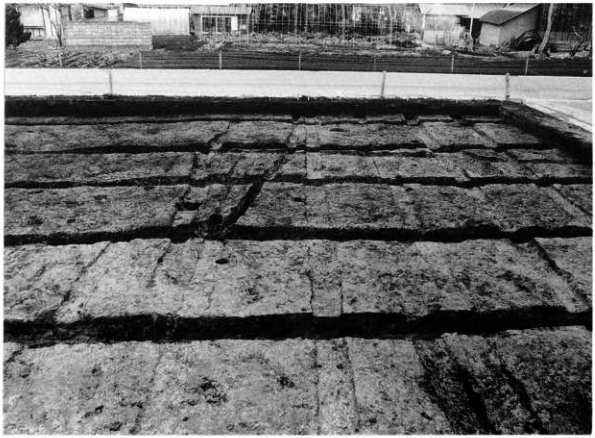
註８　前出註１文献。

註９　前出註１文献。

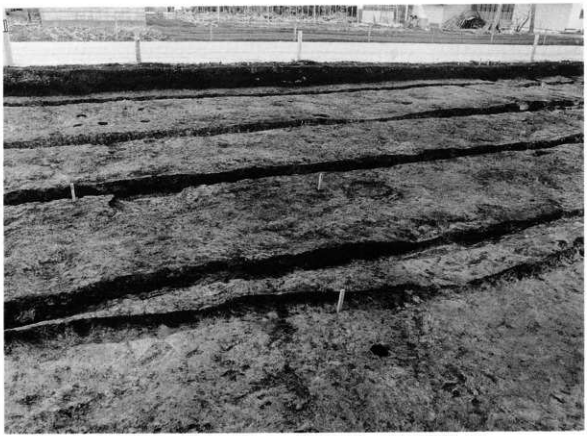


図版１　常盤小学校遺跡発掘区全景写真（西から）

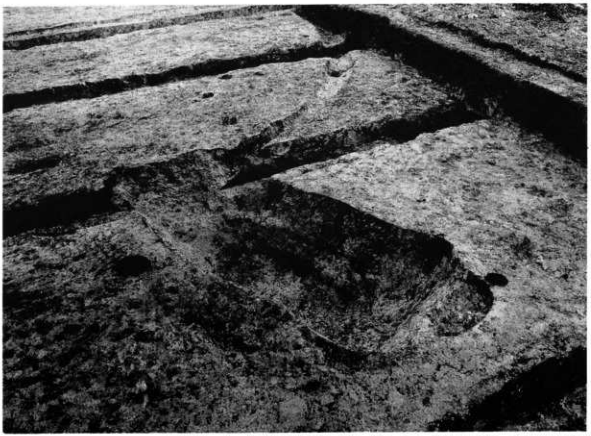




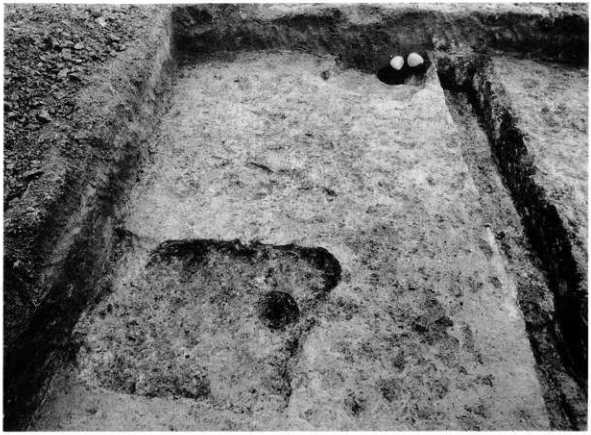
図版２　上　発掘区全景（西から）　下　発掘区東半部全景（南から）



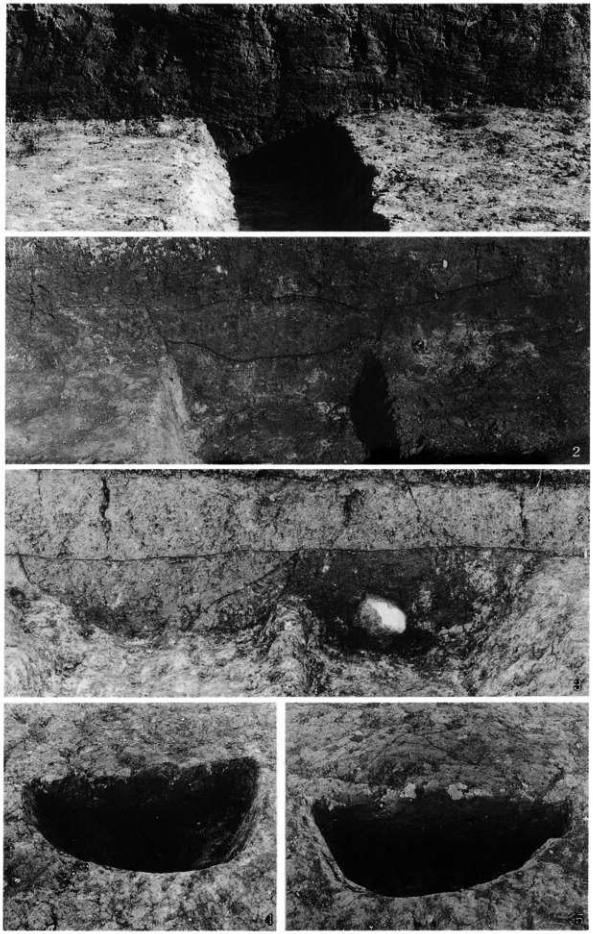
図版３　上　溝跡SD051・土壙跡SK074　下　溝跡SD052・土壙跡SK059・060



図版４　上　土壙跡SK062・061・064　下　溝跡SD052・土壙跡SK062



図版５　上　土壙跡　ＳＫ060　下　土壙跡　ＳＫ065



図版６　溝跡・土壙跡立割り状況　１　SD051　２　SD053
３　左SD058, 右SD071　４　SK064　５　SK061

水沢市埋蔵文化財調査センター調査報告書　第４集

常盤小学校遺跡

平成７年３月31日　発　行

編集／発行　財団法人　水沢市文化振興財団
水沢市埋蔵文化財調査センター
〒023 水沢市佐倉河字九蔵田96－1
電　話　0197－22－4400
ＦＡＸ　0197－22－4600

印　　刷　水沢印刷.株式会社
〒023 水　沢　市　東　町　4
電　話　0197－24－4113